

作業療法学専攻教員と学生が行う看護学部生への作業療法演習

Occupational Therapy Exercises for Nursing Students with Occupational Therapy Faculty Members

谷口清弥¹⁾、西村美登里¹⁾、二井悠希¹⁾、銀山章代²⁾

Kiyomi Taniguchi¹⁾, Midori Nishimura¹⁾, Yuki Nii¹⁾, Akiyo Kanayama²⁾

要 旨

本稿では、作業療法学専攻の教員および学生が講師となり、看護学部生に実施した作業療法演習の実践を紹介するとともに、成果と課題について報告する。

作業療法学専攻教員と作業療法学専攻4年生の学生8名が講師となり、看護学部3年生が作業療法演習を受講する。集団作業療法を1コマ、個別作業療法を1コマで実施し、講師が解説・教示を加えながら行う。演習後、看護学生は作業療法演習により、活動や作業の治療的意義を体験的に理解することができていた。また、作業療法士が援助を行いながら対象を観察・評価していること、対象との関わりにはすべて目的と意図があることを知り、作業療法士の専門的な知識と技術についても理解することができた。さらに、看護師の立場から作業療法士との協働の必要性の理解に発展していた。

今後の課題として、演習の体験を精神症状や障がいを持つ患者に置きかえて理解すること、体験と学びを深化させる学生の主体的・能動的な参加を促す教育方法を工夫すること、さらに、連携教育の視点から作業療学科の学生も看護の専門性を理解することで共に専門職の協働について学ぶ機会が求められることが示唆された。

I. はじめに

近年、我が国においては、高まる医療福祉のニーズに対応し、医療の質を保証するという観点から多職種連携によるサービスの提供が欠かせないものとなっている。文部科学省が公表した「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」においては、多職種連携・チーム医療の推進などの能力を備えた質の高い人材養成の必要性が示されている¹⁾。つまり、看護基礎教育の段階から多職種連携の意義を理解し、体験できる内容をカリキュラムに組み込むことが求められている。

このように連携協働の必要性が求められている一方、専門職の基礎教育の現場では、異なる教育コースに在籍する学生が同じ場所で共に学びあうといった専門職連携教育を行うには、教育環境の整備など多くの課題がある²⁾。そのため、実施可

能な教育方法の検討が求められている。

四條畷学園大学では、既存のリハビリテーション学部に加えて2015年看護学部が開設され、3年次必修科目である精神看護学実践論において、リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻教員と学生が講師となっていく作業療法演習を配置した。多職種連携においては、多職種の専門性を理解するとともに自己の職種との違いを理解して連携することが重要になる³⁾。連携教育の内容や方法について体系化されたものがない中で、同大学内に作業療法学専攻がある強みを活かし、精神科作業療法士の役割を理解することから始めた。

本稿では、作業療法学専攻教員および学生が講師となり、看護学部生に実施した作業療法演習の実践を紹介するとともに、成果と課題について報

¹⁾ 四條畷学園大学看護学部、²⁾ 四條畷学園大学リハビリテーション学部

¹⁾ Faculty of nursing, Shijonawate gakuen University, ²⁾ Faculty of rehabilitation, Shijonawate gakuen University

告する。

Ⅱ. 作業療法演習の実際

1. カリキュラムにおける作業療法演習の位置づけ

本学では、2年次に「精神看護学概論」(30時間)、「精神看護学方法論」(30時間)を配置している。その中で精神科における多職種の役割と連携、精神科リハビリテーションとしての作業療法について学修している。2年次に学んだ知識・技術を用いて看護実践能力を養うことを目的にした3年前期の「精神看護学実践論」(45時間)の中で「作業療法における看護」演習2コマ(4時間)を置いている。事例を用いた看護過程の展開の中で、事例患者に作業療法が開始され、患者の作業療法の目的や病期に応じた作業メニューの選択、患者の反応をアセスメントするタイミングで演習を組み込んでいる。

2. 「作業療法演習」の授業計画

1) 授業目標

授業目標は、精神科作業療法の演習を通して、作業療法の治療効果を体験的に学ぶことである。さらに、作業療法士が対象と関わる目的と方法、視点を学ぶことで作業療法士の専門性を知り、協働に向けて看護職として必要な視点を見出すことである。

2) 授業方法・内容

- ・対象：看護学部 3年生 約70名
- ・時間：90分講義2コマ
- ・講師：同大学作業療法学専攻教員1名、作業療法学専攻学生4年生8名、看護学部精神看護学教員1名
- ・方法：

1クラス35名程度の2クラス制で、集団作業療法1コマ、個別作業療法1コマで実施。看護学部教員から授業目標の説明、講師の紹介を行った後、講義全般を作業療法学専攻教員が担当する。

1回目は集団作業療法の体験とし、まず、棒体操で使用する棒を作成する。新聞紙を丸めてテープで固定するという工程を教員の説明に従い実施するが、指示通りすぐ行動できる、人に聞く、新聞をうまく丸められないなど、教員が捉えた学生

の反応をフィードバックし、このような何気ない反応の観察から、指示の理解、巧緻性、スピードなどのアセスメントをしていることを伝える。同様に、教員の口頭指示で呼吸法、リラクゼーション、マッサージ、棒体操を実施する。実施の中で、それぞれのアクティビティの目的や1つ1つの動きの効果、観察点、促し方などを教示しながら進める。一方、作業学生は、集団作業療法の和やかな楽しい雰囲気作りをしながら困っている看護学生がいれば、個別に介入する。同時に看護学生の作業遂行能力を評価し、次の個別作業演習の計画に生かすための準備を行っていた。(写真1.2)

2回目は個別作業療法の体験とし、本時間の計画・実施は教員の指導の下、作業学生が担当した。2回目の計画にあたり、事前準備として作業療法学専攻教員の指導の下、①看護学生が工程表と見本を見ながら60分で完成できる作業であるとともに実用的な作品を考える。②作業種目が決まれば作業の目的やねらい・必要な用具と材料・工程・留意点をまとめ作業計画書を作成する。③作業計画書に沿って、作業種目に応じた演習材料の買い出し、個人ごとの材料をトレイに用意するなどの準備を行った。作業学生は、ポプリ袋、毛糸でつくる鶯のマスコット、フェルトの小花のマグネット、を作業書目として考えた。当日は、作業療法学専攻教員が演習への導入を行った後、作業学生がグループに入り、患者を想定してかわりながら援助を行った。(写真3.4) 作業療法演習の内容と作業療法士の視点を表1にまとめた。

2回の講義終了後、看護学生に「集団作業療法、個人作業療法の演習を体験して、看護学生として学んだこと」というテーマでリアクションペーパーの記入を求めた。その内容を次回講義で看護学部教員が授業目標に照らしてフィードバックし、学びの共有を行った。

Ⅲ. 倫理的配慮

授業に参加した学生に対して本授業の実践を公表する目的・内容、および個人名や入学年度が特定されないように配慮することを説明し、リアクションペーパーの内容、演習風景の写真を掲載することについて書面で同意を確認した。これらの説明と同意確認は精神看護学関係の成績がすべて

表 1. 作業療法演習の内容と作業療法士の視点

内 容	作業療法士の視点
【集団作業療法】 90 分 ・新聞紙を使った棒作り ・呼吸法 ・リラクゼーション ・マッサージ ・棒体操 ・グループで振返り ・全体で振返り	・楽しむことによる気分転換 ・ストレス発散 ・他者との比較、協力、情報共有など ・健康な心身機能の維持・改善など ・人と接する事の楽しさを体験する ・体力・活動性の維持・改善 ・楽しい雰囲気づくり ・心身機能の評価（指示理解・運動企画と実行） ・集団内での行動特性の評価
【個別作業療法】 90 分 ・作業メニューを選択する （毛糸の小鳥、お花クリップ・ポプリの香り袋・塗り絵） ・別メニュー同士でグループを作る ・個別作業 / 作業療法学生のサポート ・同じ作業をした者同士で振返り ・全体で振返り	・メニュー毎の治療効果と適応、特性 ・作業遂行能力（指示の理解、巧緻性、スピードなど） ・作業の楽しさ ・作業への引きこもり ・自己評価 ・危険物の取り扱い（ハサミ・針など） ・見守り、安心感を与えるかかわり方 ・自主性の尊重と声をかけるタイミング ・個別性の尊重、ポジティブフィードバック

出た後の 4 年次 2 月に行った。

IV. 演習後の学生の反応

授業目標に照らした学生のリアクションペーパーの記述内容を一部紹介する。なお、OT とは作業療法の略であり、学生の記述のまま掲載した。

1. 作業療法の治療効果を体験的に学ぶ。

- ・集団の場合、周囲の動きを真似たり、コミュニケーションをとりながら身体を動かすことで、対人交流などの社会生活の基本となることを訓練することができる。
- ・ストレッチや呼吸法では、自分の身体に目を向け、変化に気づくきっかけになる。
- ・演習前は眠くてボーっとしていたが、身体を動かすことで頭がさえて身体もスッキリした。
- ・気持ちいいという感覚を刺激して、新たに違う感覚が刺激されていく。
- ・個人 OT では作業に集中できた。その集中は幻聴などに悩んでいる方にとっては有効であるということが少し理解できた。
- ・作品が出来上がったとき思った以上に達成感があり、この積み重ねが自信につながると感じた。

- ・作業によって自分と向き合ったり、周りとかかわり合ったりするきっかけになる。
- ・身体を動かしたり、作品を作ったりすることがとても楽しかった。
- ・気分転換、リラクゼーション、行動意欲に繋がると感じた。

2. 作業療法士が対象と関わる目的と方法、視点を学ぶことで作業療法士の専門性を知る。

- ・行なわれる OT には目的と意図があり、多角的な視点で見ている。
- ・患者の生活の障がいとなっている精神症状を緩和するために、それぞれの個別性に沿った作業療法を実施し、症状とうまく向き合って生活を営めるようにする。
- ・わかりやすい説明の工夫や自己効力感を高めるような接し方、はさみや針の安全管理対策がされている。
- ・看護師が患者の特徴を捉えて身体を観察し、アセスメントして援助を行うように作業療法士さんも患者の特徴を捉えてその人に必要な内容をアセスメントして活動に組み込んでいた。
- ・作業を完成させることがゴールだと思っていた

が、そうではなく作業に対する意欲や過程を評価するのだと学んだ。

- ・見守りの際も患者との適度な距離や観察できる位置などを考えていた。
- ・他職種連携というが、実際に作業療法士がどのような仕事をしているかわからなかった。しかし、今回体験してみて作業療法士の役割が具体的にどのようなものか学ぶことができた。

3. 協働に向けて看護職として必要な視点を見出す。

- ・その人に合ったアクティビティを判断する必要がある。この判断を行うためには日頃患者を見ている看護師も協力して行なうことが重要だと感じさせられた。
- ・他職種との協力が患者の能力向上に繋がることから、情報を共有し連携していくことが必要になる。

- ・患者の OT には必ず目的があると学んだ。その目的や OT の様子、OT でどのように変化したかを看護師も理解することで、より患者のレベル、能力に合わせた看護が提供できる。
- ・OT とは個人・集団あるいはメニューによってそれぞれその人に合った目的・ねらいがあると学び、看護としてはその目的・ねらいを理解してその人の目指す生活像を考えていくことが必要だ。
- ・質の良い援助を提供するためには対象者のストレングスや残存能力を知る作業療法士さんとうまく情報を共有し合う必要性を実感した。
- ・看護師だけでは見ることが出来ない情報を作業療法士は見ることができ、またその逆もある。そのため、作業療法士との連携が必要であることがわかった。



写真 1. 2 集団 OT の様子



写真 3. 4 個人 OT の様子と作品

V. 演習の成果と課題

看護学部生は、作業療法学専攻教員と学生の指導による作業療法演習により、活動や作業の治療的意義を体験的に理解することができていた。集団作業療法と個別作業療法の両方を体験することで、集団ではアクティビティの種目による効果のみならず、人との関わりや社会性、自己の客観視、個別作業療法では作業への集中や作品を完成させることでの達成感が得られるなどそれぞれの特徴と効果を体験していた。

また、作業療法士が援助を行いながら対象を観察・評価していること、対象との関わりにはすべて目的と意図があることを知り、作業療法士の専門的な知識と技術についても理解することができた。

看護師も作業療法士も「精神疾患で生活に支障をきたしている患者の生活の支援を行う」という点においては同じ目的を共有している。そのうえで、看護師は日常生活の援助を通して生活支援を行い、作業療法士は具体的な作業・作業活動を用いて生活の障がいに関与し、個々の生活の再建を支援する⁴⁾。このような関係がわかることで、それぞれの専門性を生かした協働の必要性の理解に発展していた。学生の記述の中に「作業療法士と看護師の連携」や「病棟ケアへ継続」の内容が示されており、それぞれの専門性を理解したうえで情報を共有し、お互いの専門性を活かして連携することの必要性や、他職種との連携が自身の役割に活用できることを学んでいた。特に看護師は、患者の最も身近にいて生活状況に関する情報を多く持っていることが強みであり、具体的な生活状況を他の専門職に提供できるキーパーソンである。このような多職種連携の要としての看護師の役割にも繋いでいく必要がある。

本演習の今後の課題、改善点として以下のような点が考えられた。1つは、今回の演習は健康な学生が作業療法を体験しての学びである。それを様々な精神症状や障がいを持つ患者に置きかえて本来の患者の体験として発展させる必要がある。記述の中には「その集中は幻聴などに悩んでいる方にとっては有効であるということが少し理解できた。」など自身の体験を患者に置き換えて考えることが出来ている学生もいた。そのため、作業療法がどのような疾患や状態の人に効果があるのか

まで関連づけることで、精神疾患を抱える人に対する治療的意義をさらに深めることが可能である。

また、事前学習と上記の課題も含めて「まとめ」の方法を検討したい。演習後の学びの共有として、教員がリアクションペーパーの内容を抜粋しながら授業目標に沿ってフィードバックする形でまとめをしていた。しかし、学生個々の体験と知識を繋ぐためには学生達自身がディスカッションすることで学びを深化させることが求められる。学生の主体的・能動的な学びを促す教育方法を工夫していきたい。

今回の演習は、看護学生が作業療法士の役割と専門性について理解するものであり、作業療法学生にとってはその機会ではなかった。つまり、専門職連携教育で言われている相互の専門性を学ぶ機会としては十分でない。今後、専門職が協働するために、互いの専門性に触れる機会が必要であり、互いに学び、双方の専門性を理解することで、専門職の協働について検討することが必要である。

作業療法演習の講師を担当した作業療法学専攻学生は、教員から講義目的と到達目標、計画を伝えられ、指導を受けながら看護学生に適したアクティビティメニューを検討し、必要物品の買い出し、事前に作業を試作して援助計画を立案するなどの準備を行っていた。学生にとっては演習協力単位にかかわるものではなく、自主的な参加であることから、今後継続するためには何らかの形で授業時間として反映される仕組みが必要である。一方で、作業学生らの演習後の感想で「皆が笑顔になっている姿を見て作業ってすごいな、作業の持つ力を改めて学ぶことが出来た。」「ねらいをもって実施するためにはどのような介入をすればいいのかなど入念な準備の重要性を実感した。」「精神科実習の前にこのような体験ができ学ぶことが多くありました。」など肯定的な感想が多くあった。このことから、作業学生にとっても自らの専門性をより深く学ぶ機会となっていると言える。

VI. おわりに

本稿では、作業療法学専攻教員と学生が看護学部生に行う作業療法演習の実践を紹介し、学生の反応と課題を示した。本演習の経験は、学生達に他職種への興味と共に連携の意義や必要性に気づ

き、意識を変化させたと考えられる。また、多職種同士、互いが専門性を理解することで、より自身の専門に誇りを持つことに繋がる。本演習を今後も改善を重ねながら継続していきたい。そして、演習での学びが、各領域の実習で患者の看護を通してさらに深まり、4年次の総合実習でチーム医療に発展できるよう、多職種連携教育について学科全体で系統的に学べるしくみにもつなげていきたい。

参考・引用文献

- 1) 厚生労働省：平成 29 年（2017）看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～，2019 年 1 月 29 日，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm
- 2) 原和彦：連携教育の実践と課題，PT ジャーナル，43 (12)，1043 ～ 1051，2009.
- 3) 笹本美佐、岡崎明子、追中敏孝、金本真理子：精神科病院において多職種連携で行なう統合失調症患者への退院支援で看護師が得た学び，日本赤十字広島看護大学紀要，15, 21-29, 2015.
- 4) 山根寛：精神障害と作業療法，三輪書店，97，2010.